令和７年度第１回　市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議　会議録

日　時　　令和７年５月 30 日（金）　14：00～15：40

場　所　　姫路市市民会館　５階　第 11 会議室

出席者　　構成員７名　　事務局５名

（構成員）　米谷　啓和　座長　　三宅　靖子　氏　　井関　崇博　氏
　　大西　麻衣子　氏　　瀬木　陽介　氏　　増田　英敏　氏　　横田　和江　氏

（事務局）　市民参画部　木村 部長　　市民活動推進課　門口 課長
　　市民活動・ボランティアサポートセンター　吉田 所長　前坂 主任　杉尾 主事

次　第

１　開　会

２　議　事

報告

（１）令和６年度　事業報告について

（２）令和７年度　事業計画について

議題

・ひめじおん講座の内容について

その他報告事項

なし

３　閉　会

会議の進行記録（要点記録）

議　事（報告）「（１）令和６年度　事業報告について」
「（２）令和７年度　事業計画について」

事務局：　資料に従って説明

座　長：　二つの報告事項についてご質問やご意見を伺いたい。

構成員：　高校生、専門学生、大学生を対象とした「ひめじ夏のボランティア体験」について、これまでどの程度の参加者があり、マッチングがうまくいったのかを知りたい。また今年度はどのように事業を進める予定か。

事務局：　令和２～６年度の受入団体数と参加者数は、資料１「令和６年度　事業報告について」に掲載している。
当該事業は平成 30 年度からスタートし、受入団体・メニュー数が徐々に増えてきた。今年度も受入団体・メニューともに昨年度よりも増える予定。参加者も令和５年度は 50 人に対し、令和６年度は 92 人と大幅に増えた。
また、昨年度の運営会議で「学生がボランティア体験だけ行ったとしてもその先に繋がらない。その前段階から学校と連携し、地域課題を見つけ自分事として捉えてもらいながらその流れの中で、ボランティア体験事業に参加してもらってはどうか」という意見をいただいた。そこで、今年度は市立姫路高校の探究授業にボランティア団体とともに出前講座に行かせてもらった。

構成員：　体験のあとの情報はもっているのか。

事務局：　センターでは、受入メニューと参加者の体験希望とのマッチング調整を行っている。実際の体験後、引き続き継続して活動に参加されているかどうかは追いかけきれていない状況である。

構成員：　センターとしては、体験後の継続的な活動を目指しているのか。もしくは、体験日のマッチングだけでいいと考えているのか。

事務局：　学生対象のボランティア体験では、就職や進学目的でボランティアしたいという方も多く、その後の継続した活動や担い手になかなか繋がらないといった受入団体の意見もある。

ただセンターとしては、まずはどんなきっかけであれボランティアをして、どんな団体がどういう活動をしているかを知っていただく、あくまでもきっかけ作りに今のところは重きを置いている。

構成員：　うちの大学でも地域づくり人材を育成するプログラムをやっているが、プログラムを終えた学生が地域に出て自ら動き出しているかといえば、そうはなっていない。お膳立てし過ぎると参加するだけで終わってしまう。むしろ用意しない方が、自分たちで団体を作ったりするかもしれず、いいのかもしれない。

座　長：　その他忌憚ない質問、意見などあれば。

構成員：　昨年から始まった「ボラスタ！in ひめじ（デジタルスタンプラリー）」だが、私たちのような個人規模のボランティア団体だと、学生に出す活動証明書の効力に疑問があったため、この事業ができたのは大変よかったと感じている。
ただこれを夏ボラやひめボラなどのイベント時だけでなく、継続して利用できるのかなど、今年度はどう実施していくのか知りたい。

事務局：　まだ事業が始まったばかりなので、今年度も昨年同様の形で、いかに広く利用してもらえるかの周知をしていきたい。
ただ将来的には利用状況を見ながら、対象事業を増やすなどの工夫をしていかないとなかなか事業が浸透しないと考えている。実際に、活動に参加された方のアプリ利用状況はどうか？

構成員：　私も積極的に呼びかけしており、登録してくれる人は結構多かった印象。
ただ 8 月や 11 月のイベント時だけが対象となると利用者も忘れてしまうので、年間通して、デジタルスタンプを集めていけると面白いと思う。

事務局：　通年のボランティア体験メニュー「ハジメのイッポ」にメニュー登録している団体は年間通してアプリを利用いただけるようにはなっている。

座　長：　活動履歴証明書の活用方法について、学生側からの反応はどうか。

事務局：　紙の証明書を申請する際、利用目的を記入してもらうようになっているが、ほぼ進学・就職目的での申請となっている。そのため、デザインも３種類から選べるが、シンプルなデザインが選ばれている。かわいいデザインもあるので、お子さんなどにも活用してもらいたい。

座　長：　大学から見てこの事業はどうか。

構成員：　一つの活動参加へのきっかけにはなると思う。ただ、就職活動などで証明書を活用するとなれば、これを使ってどれだけプレゼンできるかが重要だが、企業へのアピールへのきっかけにはなると思う。

構成員：　事業が始まったばかりで、証明書をつけて入試に持ってこられた方はまだ見かけていない。できるだけ個性を尊重したり、自分をアピールする機会をつくるなど、大学でも入試の形態を広げているので、こんなボランティアをしましたとアピールする人が今後は増えてくるのかなと思っている。

構成員：　証明書の「活動内容」欄をもう少し詳しく書くことはできないのか。入試や就職面接で提出した際に、例えば「子育てサロンのお手伝い」だけだと、相手には伝わりづらい。そこで何を学んだのか、どう自分が変わったのかといった文章が少しでもあったらいい。

事務局：　システム上、発行される証明書の「活動内容」の文字数制限があるので難しい。あくまで活動履歴の証明なので、これを使って学生さん自身がプレゼンしていただく形になる。また、市長名・市長印で発行されるのが紙の証明書のポイントとしている。

構成員：　市内の高校の探究授業などに出向いて行った際に、ボラスタ！in ひめじのアピールはできないのか。

事務局：　そもそもセンター自体の認知度も低いので、まずはそこからである。ＳＮＳなどで情報発信をしつつ、直接学校に出向く機会があったときに、説明して利用してもらえるようにしたい。

構成員：　探究授業がいろんな高校でされているので、早くからボランティアを知ったり身近に感じたりしてもらい、若者の力をもうちょっと広げられたらいい。生徒たちは“やらない”のではなく“知らない”というだけで機会を奪われているかもしれない。

事務局：　探究学習で大学や市役所、企業に取材に行ったり、探究テーマに取り上げられたりすることは多いが、ボランティア団体に関しては、先生方自体が今まであまり接点がなかったという声も聞く。まずは知っていただくところから広げたい。

構成員：　姫路城マラソンなどの市のイベントボランティアは、大学に声がかかり、学生も参加してくれるが、市のイベント以外の姫路のボランティア活動がもっと周知されたらいいのにと思う。

座　長：　ボラスタ！in ひめじ以外の事業で何かご意見等あれば。

構成員：　職員５人の少数精鋭でこれだけの幅広い活動をしていて、実績が右肩上がりなのはすごいことだと思う。私が現在所属しているカントリーダンスも姫路観光ボランティアガイドの会も、ひめボラでボランティア体験をし、繋がって入ったのでありがたい。
一方で運営会議を年に 3 回開催し、そこで出た提案事項などをどう繋げていくのか。
配付資料のうち、前回の運営会議での提案事項の中に「ひめボラ市のアンケートは、属性ごとに意見を反映していくとよい。」という良い意見がある。今年度や来年度に向けて、どうやってデータを取り、分析・評価し、見える化していくのか。

事務局：　ひめボラ市開催後、対象者ごとにアンケートを取っている。運営会議の第 2 回か第 3 回にはアンケート結果を報告させていただく。

構成員：　ひめじおんまつりからひめボラ市に変わり、大成功だという大きな流れとしては素晴らしい。今後さらにステップアップするためには、いろんな人の意見を聞いてさらに質の面でどうしたらいいかを考えていってほしい。

構成員：　ボラスタ!in ひめじも、団体がボランティア参加者にご案内するときに説明をしないといけないが私たち自身がわかってない。昨年のひめボラでは若い参加者が多かったので、ある程度案内してセンターからの説明資料を渡せば、あとで問い合わせするなどで詳しく聞いてもらい、活用してもらえたと思う。
この場で皆さんのご意見を聞いてそれぞれの立場でのいろいろな考えを勉強させていただいている。ここでもう少し勉強させていただきながら今後提案していきたい。

座　長：　今日は第１回ということで、徐々に慣れてもらいながら、今日の議論と実際に事業が行われるなかで、それを受けてまたアイデアをいただければと思う。

議　事（議題）「ひめじおん講座の内容について」

事務局：　資料に従って説明

座　長：　ファシリテーション講座の講師は誰か決まっているか。

事務局：　検討中である。いい人がいれば教えていただけると参考にさせていただきたい。

座　長：　それぞれ講師も含めてご意見をいただきたい。また今年度の開催に限らず、今後に向けて、身の周りでもよく耳にするテーマなどでも。

構成員：　例えば、学生が自分たちで活動する場合、ぼやっとした問題意識はあるが具体的に何したらいいのかを絞り込むのが一番難しく、そこで止まってしまう。
ひめじおん講座の分類の中でも、興味があることややりたいことを事業にする「事業化（プロジェクト化）」に関する講座が足りない気がする。
そこでちょっと動いてみたらいろんなことがわかってきたり、出会いがあったりして、半年やったことが次の半年に繋がる場合もある。
最初の一歩をどう組み立て何に絞っていくのか、それをどういうパートナーと一緒にやり、事業化を考える上で誰に話を聞いたらいいのか、などを学べる機会があればよい。そういう講座があれば、大学生や高校生が、もしかしたら自分たちもできるかも、チャレンジしよう、と思ってもらえる。

構成員：　それと「ボランティア」は、取り組み姿勢みたいなものが前面に出ている言葉であまり好きではない。むしろ大事なのは、社会課題を解決していくということ。
「ボランティア講座」という倫理的に聞こえる用語よりも、「一緒に社会を良くしていきませんか？」ということが目指されているような用語の方がよい。
「何でもいいから社会に貢献しましょう」ではなく、「何でもいいけどやるからにはうまく成果がある形でやっていきましょう、そのためのノウハウを提供しますよ」という打ち出し方の方が響くのでは。

座　長：　ボランティアに代わる言葉とか打ち出し方があれば。確かに「ボランティア」に聞き慣れているから普通に使ってしまっている。

構成員：　学生もボランティアには興味やイメージがない。ゴミの話や子ども食堂には興味はあるが、別にボランティアをしようという気はなく、課題に興味がある。我々の世代とは違い、今の世代は、ボランティアと聞くと、どちらかと言えば若い人が関わることではないという感覚。それよりも「起業」とか「プロジェクト」みたいな言葉の方が響く。

座　長：　今、兵庫県立大学と一緒に、地域創生リーダー教育プログラム（RREP）に取り組んでいる。そこでのプログラムも、まずは “地域の人と出会う”、その中から“地域課題”を発見してその解決策を、というのを 1 年かけてやる。確かに地域課題と出会うところが大事な気がする。
基礎講座で「NPO とは何か」とか「ボランティアとは」をテーマにしても、人は集まらないと思う。
一方で、例えば「野里の地域課題と出会う」講座であれば、案外人は集まると思う。町家とかは学生も興味があり、それをどう生かすかっていうので企業も参入してきて、町家を守るために買ったけどどうしようかと悩んでいることもある。
企業と繋がるという点でも、地域課題と出会う講座は食いつきがいいかもしれない。

構成員：　私も同感である。いろんな思いを持って活動しているボランティア団体があるので、それこそ今高校生が取り組んでいる探究学習のような内容を講座のメニューとして挙げてもいいのでは。それとセットで活動体験もして、こういう思いを持ってやっているんだというのを実際に体感してもらい、そこからまた考えていこう、といった活動講座があってもいい。

構成員：　社会福祉協議会では、「生活支援体制検討会議」を開催している。
それは高齢者を切り口にして住み慣れた地域で暮らし続けるための課題は何か、を地域の方と専門職が一緒になって考える場と考えている。
その場で昨年度、高齢者の方がスマホに困っている、情報に困っているという課題を共有することができた。そこで、中学校に相談に行き、中学生に教えてもらうこととなった。結果、教えてもらう高齢者側は若い子に教えてもらってすごく嬉しかったという声があり、教える学生側もみんな工夫して教えてくれ、すごく楽しかったという声があった。
今までのように「ボランティアをしよう」という呼びかけも必要かもしれないが、あわせて「こんな課題をともに考えてみませんか」といったお知らせをする、知ってもらう機会があれば興味を持ってくれる人は多いだろうと思う。

座　長：　センターも年数が経ち、いい意味で熟成してきているが、違う柱や違う関わり方が必要かもしれない。学生はボランティアを学ぶ立場みたいに思い込んでいたが、実は先生にもなれるという逆転するような仕掛けもあればより良くなる。

構成員：　大学では地域包括ケア実習があり、学生が地域包括ケアセンターで各地域の課題を勉強したうえで、実際に地域に出て実習する。その後学生たちが学内に帰って

発表した中で、そこでもスマホの使い方を高齢者の方に教えてあげないとダメなんじゃないかという同様の意見が出た。
実際に中学生が高齢者とコラボした社協の取り組みはすごくいいなと思う。先ほどから意見が出ているように、若者も目の前に社会貢献の課題があると積極的に前のめりになれる。講座の中にもそういった「若者の力」に着目したテーマがあれば、人が集まるのでは。若者が講師になったり、交流したりして、双方が楽しめ、それが結果的に若者にとってボランティア活動になればいいなと思う。

構成員：　地域課題を切り口でやると分かりやすいし、一方で若い人をどうやって、ボランティアに引き込むのか、面白く環境設定したらいいのかが大切。手段はいろいろあるが、現在あるセンター事業の「ハジメのイッポ」をセンターに掲示するだけでなく、ひめボラ市と絡めるなど、今後どう深めていくかを考えていかないとなかなか活動には繋がらない。

事務局：　確かにセンターに掲示しているだけでは、相談に来ないと紹介できないのでもったいない。講座やひめボラ市などのセンター事業や学校の探究授業に行かせていただく中で、ご紹介したり繋げていったりできたらと思う。

座　長：　高校や大学と繋がって、ハジメのイッポの次の形が検討できればと思う。議事以外で何かご意見とかご提案があれば。

構成員：　自身の団体の活動参加者に申込理由を聞いてみると、ＳＮＳで顔出しして積極的に発信をしていて雰囲気が分かりやすかったという声がある。逆に申し込んでも参加までの一歩がかなりしんどいという声を多く聞く。
そこがスムーズになるような仕組みや、団体や活動の雰囲気が事前に分かるような工夫をハジメのイッポなどで検討してもらえれば、参加率も上がると思う。

座　長：　今日は、ボラスタ!in ひめじとハジメのイッポの次の形を模索していこうという話だったと思う。では、今回はこのあたりで閉会としたい。